

# 授業づくりにつなぐ個別の指導計画に関する実践

柳田 直子

相川 勝代

(長崎大学大学院／長崎市立山里小学校)

(長崎大学教育学部)

## 1 問題と目的

本研究は、個別の指導計画を授業づくり、及び授業改善につなぐため、個別の指導計画と授業づくりとの関係を明らかにすることを目的とした。すなわち、個別の指導計画の Plan-Do-See の過程を明らかにし、事例に適用・考察することであった。湯浅（2002）を参考に、教師と子どもがどう主体的にかかわり合うかを問い掛ける教授学的観点から授業づくりを見直した。さらに、個別の指導計画に基づく授業づくりにおいて、教授過程で、子どもの内面の力を育てながら子どもの主体性をどう引き出していくかという問題、及び教育的空間としての居場所にかかわる問題を追求し、考察を行った。

## 2 個別の指導計画に基づく Plan-Do-See

個別の指導計画の Plan-Do-See の各過程における要点は、以下のとおりである。

### (1) 個別の指導計画の作成

個別の指導計画の実態把握では、多面的な視点から、子どもの「できかかっていること」や「できるようになってほしいこと」を見つけることが重要である。さらに、どのようなとき、その子どもは最も生き生きしているのか、その子どもの心の拠り所となるものは何か、成長の鍵になる発達の芽は何かなど、教育課程や個別の指導計画に反映させられそうなものを見出そうとする教師の動的な行動観察、子どものできるところを分析的に見る教師の視点が大切だといえよう。そこから、子どもが向かうべき方向目標としての長期目標を、そして達成することができる到達目標としての短期目標を指し示すことが作成の要点となる。

### (2) 個別の指導計画を生かした授業づくり

個別の指導目標を達成するための授業を構想する際、その目標がどのような授業を通して達成できるのか、授業における子どもの可能性をイメージし、授業の構想を検討していくことが重要である。授業を展開する際、教師は、動的な実態把握をしながら、子どもの活動を引き出し、方向付け、価値付ける等の働き掛けを行うことが大切である。教材を媒介として仲間や教師とかかわり合いながら、学ぶ楽しさと楽しい学びの実現を目指し、能力の獲得が内面を豊かにすることと統一的になされるような授業づくりが求められている。従って、学びと生活の密接な関連性と親和性、集団づくりを、子どもが学びに主体的に参加するという視点から検討する必要がある。

### (3) 授業評価

具体的な指導目標に沿って、授業を展開していく過程で、実態把握において不明であった点や不確かであった点が明らかになったり、授業を構想した際の子どもの姿とは違った姿を子どもが見せたりすることがある。そこで、評価後、子どもの全体像を捉え直したり、個別の指導目標の再確認をしたり、指導形態、指導方法の検討等をしたことが重要であろう。「指導と評価の一体化」と同様に、「指導と子ども理解の一体化」が重要だといえる。

図1は、個別の指導計画のPlan-Do-Seeの過程を示したものである。

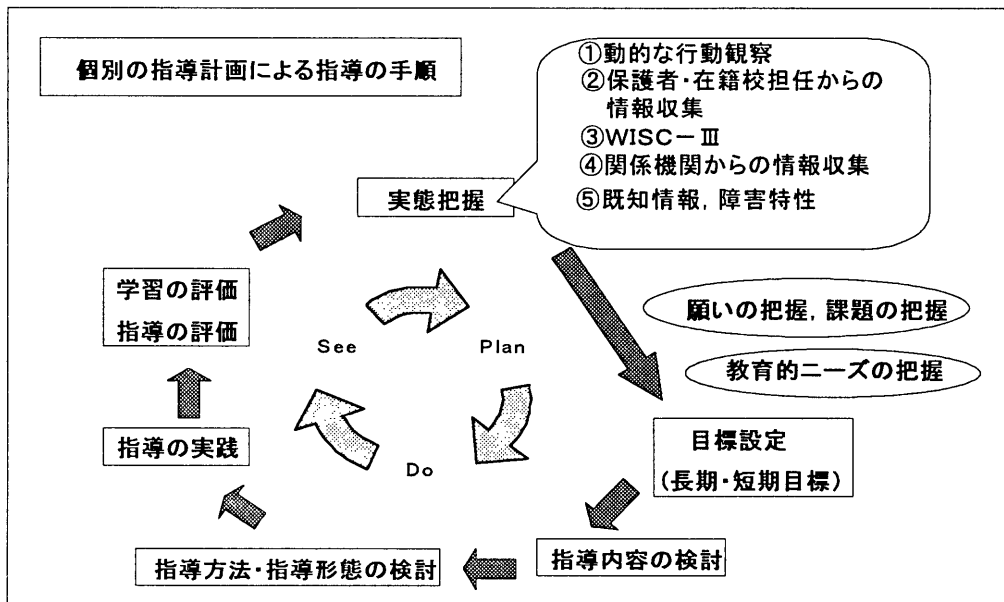


図1 個別の指導計画のPlan-Do-See

### 3 個別の指導計画を授業づくりにつなぐための実践研究

情緒障害通級指導教室には、11名の子どもが通級しているが、ここでは、C児の事例研究を通して、個別の指導計画に基づいた指導の実際について述べる。

#### (1) 対象児(C児)の概要

注意欠陥多動性障害と診断された2年生の男児である。今年度は、週1回90分間の個別指導、及び、10月より学年の枠を越えた4人での小グループ学習(月2回)を受けている。在籍校では、離席が多く、かっとなったときに制止がきかない。1年生の6月に診断名がつくまでは、理不尽な叱責や注意を受け続けてきた。WISC-IIIの検査結果は、言語性IQ=124、動作性IQ=99、(全検査IQ=113)であった。

#### (2) 個別の指導計画の作成

##### ① 願いの把握

ア) 本児: 「ものづくり活動が好きなので、工作がしたい」

イ) 保護者: 「気持ちをコントロールできるようになってほしい」「友達と

仲良く遊べるようになってほしい」「自己肯定感が低下している  
るので、よさを伸ばしてほしい」

ウ) 在籍校担任：「かっとなってもすぐに冷静さを取り戻してほしい」「整  
理整頓ができるようになってほしい」「自分の役割が果た  
せるようになってほしい」「少しでも長く席に座れるよう  
になってほしい」

## ② 課題の把握

本児は言語性 IQ と動作性 IQ には、有意な差が認められると共に、個人内差  
の大きな子どもであった。高い言語水準をもち、実際的な知識を表現する力は  
極めて高いが、現実場面では、集団の中で不適応行動をとってしまう。興味・  
関心の幅が限定されており、漢字や計算などの繰り返し学習には取り組みたが  
らない。鏡文字が多いが、「読めるからいい」というように、課題を避ける様  
子が見られた。このようなことから、本児は、自分の行動がよい結果に結び付  
いた経験が少なく、自信をなくしていると思われた。そこで、衝動的な言動の  
背景にある挫折感や失敗感に寄り添うことがまず大切だと考えられた。

## ③ 教育的ニーズから長期・短期目標、及び指導の基本方針

本児の教育的ニーズから長期・短期目標、及び指導の基本方針を表 1 に示す。

表 1 教育的ニーズから長期・短期目標、及び指導の基本方針

教育的 ニーズ	場や状況に応じた適切な言動 をとることができる。	自信をつけ、自己肯定感を高める。
長期目標	他人の意見を聞いたり、自分 の意見を言ったりして、適切 に人とかかわることができる。	自分で決めたことを最後までやり抜 くことができる。
短期目標	①ルールを守って魚釣りゲー ムができる（個別）。 ②自分の意見がとおらなくて も、話し合いに参加するこ とができる（小グループ）。	①造形活動を楽しみながら、カレン ダーを製作することができる。 ②「すつとびとびすけ」の詩を自分 で決めた目当てを意識しながら音 読することができる（共に個別）。
指導方針	人とかかわるための基本的な スキルを身に付ける。	満足感・成就感を味わうことで、学 習意欲の向上を図る（見通し、内発 的動機付け等）。
	①共感的・受容的な対応をし、強制や禁止をしない。 ②指示をできるだけ少なくし、自分で考えて決めるようにする。 ③努力や活動の成果をしっかりと認め、褒める（自己・教師評価）。 ④興味・関心、本児の願いを生かした教材を選択する。	

## (3) 個別の指導計画に基づく授業実践、及び授業評価

### ① 個別指導

個別指導における授業の構想は、図2に示すとおりである。魚釣りゲームは、教材となる魚を作る活動から取り組んだ。また、カレンダー作りは、図案を自分で選び、試行錯誤しながら製作活動に没頭する時間を十分に保障した。本児に与えた教材が、「ものづくりが好きなので工作をしたい」という本児の願いを生かしたものであったこと、本児に主導権を持たせる場面を設定しながら指導を展開したことにより、教師とのかかわりを楽しみながら、持てる力を発揮し、意欲的に課題に取り組むことができた。刻々の肯定的な評価活動を通して、本児の頑張りやよさを認めることにより、苦手とする詩の音読の課題にも、抵抗感を示さず、目当てを意識しながら取り組むようになった。この活動の振り返り活動において、「読み間違えたから、75点」というように、客観的な自己評価の力がついたことは、大きな成果であった。課題としては、「魚釣りゲームをしよう」の実践から、勝敗へのこだわりが強く、ルールを自分勝手に変えようとする事等が明らかになった。

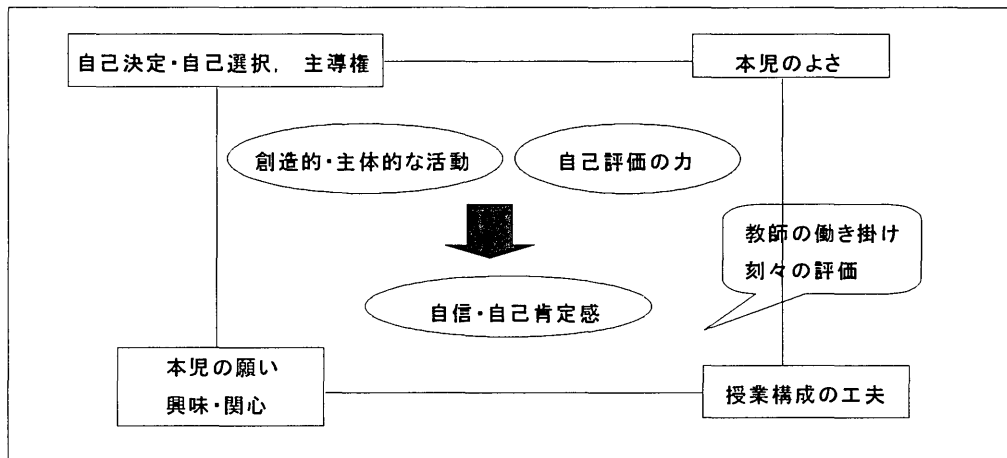


図2 個別指導における授業構想

### ② 小グループ学習

個別指導において、浮き彫りになった課題は、「ルールの遵守」、「他者にも自分と同じように思いや考えがあることへの理解」、「役割の遂行」であった。これらは、指導の形態を検討し、4人で実施した小グループ学習で、達成を目指した。小グループ学習における「サーキット大会をしよう」の単元構想は、図3のとおりである。「サーキット大会をしよう」という単元は、子どもたちが話し合いで決めた単元である。子どもたちが葛藤しながらも、4人で問題を解決していく過程を経験したことが、仲間意識を育て、安心と自由のある空間をつくりあげた。活動の選択、コースの設定、表彰状・メダルづくり、サーキット大会という一連の活動において、教師はサポート役に徹した。子どもたちは、常に、意欲的・主体的に動き、当日は、4人の精一杯楽しむ姿が見られた。「他者にも自分と同じように考えや思いがあることへの理解」は、「人の意見を聞いて

たり、言ったりして話し合いで意見を調整する」という活動を通して進歩が見られた。「役割の遂行」、「ルール」の遵守」も、仲間意識が育ち、安心して自分が出せる場では何の問題もなく遂行された。

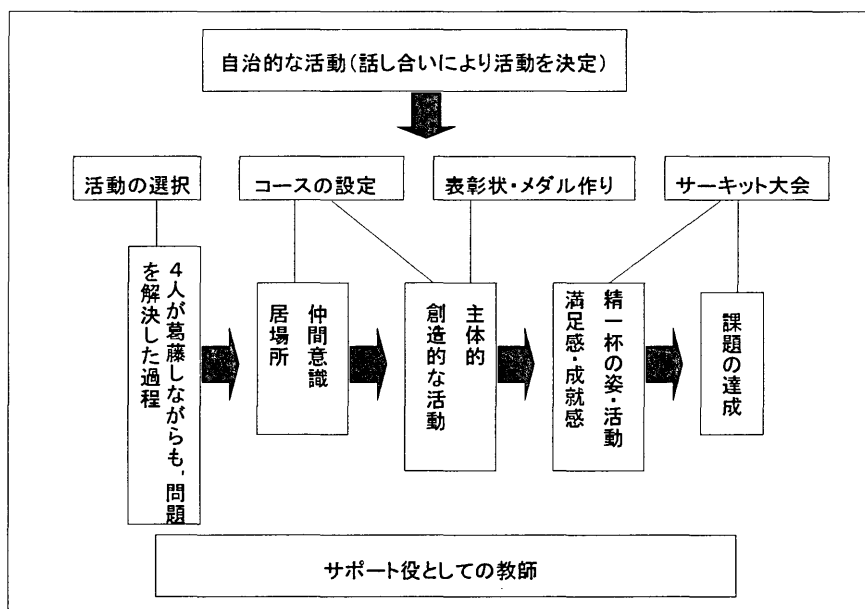


図3 小グループ学習における授業構想

#### (4) 考察

個別指導の場を通して、目標の達成のためには、障害特性からのアプローチだけではなく、学びと生活の密接な関連性と親和性を認識し、興味・関心、本児の願いを生かしつつ、何を、何で教えるのかを問い直すことこそが、子どもの主体的な学びを支えると考えられた。そして、子どもの学習意欲、参加の意思を育てるためには、自己への肯定的な理解を育てることが、重要だということも検証された。また、小グループ学習は、自分自身にのみ向きがちな意識や視野を広げ、他者と共感したり、他者の考えや思いにも関心を向けたりするために有効であった。個性や力が教師や仲間と共に交わり、響き合うことによって、より豊かに伸長されるような多様性のある学びを実現していく中で、子どもの主体性が発揮できると考えられた。それは、自由と安心のある「居場所」の重要性を示唆するものである。子どもが自分の意思や考えで働き掛ける場や状況を整えることは、教師の重要な仕事であり、そのことが、子どものやる気を育て、肯定的な自己理解、自信に結び付く。子どもたちが安心して、自由に学びに参加することができる集団の質、居場所としての教育空間の質が問われ、その場づくりが求められている。さらに、「させられる活動」から「する活動」へ、「与えられた活動」から「自己選択・自己決定する活動」へという、「できる状況づくり」に重点を置いた取組が求められている。そして、そのような授業を導き出す手立てとして、子どもが向かうべき姿、内容・方法を明確に示した個別の指導計画の重要性が一層明確になった。